

1. 鉄筋の表示記号

Table with 4 columns: 鉄筋径 (Reinforcement diameter), 表示記号 (Symbol), 異形鉄筋 (Deformed reinforcement), 表示記号 (Symbol). Rows include D10, D13, D16, D19, D22 and D25, D29, D32, D35, D38.

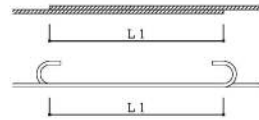
(注) 本図集において、鉄筋の表示方式は、上記の形式とする

2. 鉄筋の表示方式

Table with 2 columns: 表示方式 (Representation method), 表示内容及び内容 (Representation content and details). Rows show symbols for n-Dm, Dm @L, Dm @L(D), Dm Dm' @L, and Dm @L 千鳥 (Staggered).

(注) 本図集において、鉄筋の表示方式は、上記の形式とする

・L1 (重ね継手) の長さは下記に示す値とする。



公共住宅標準詳細設計図集

3. 鉄筋の定着および継手長さ

Table with 7 columns: コンクリート設計基準強度 Fc (Concrete design strength), 鉄筋の種別 (Reinforcement type), フックの有無 (Hook presence), L1 (Lap length), L2 (Development length), L3 (Development length), 床版 (Slab). Rows are categorized by Fc (18N/mm², 21N/mm², 27N/mm²) and reinforcement type (SD295A, SD295B, SD345, SD390).

継手の定着
○重ね継手と定着の長さは3の表を基準とする。ただし径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い方の公称直径による。
◇L1は継手並びに下記のL2及びL3以外の定着長さを示す。
◇L2は異形鉄筋で割断線のおそれのない箇所の定着長さを示す。
◇L3は小梁及び床版の下端部の定着長さを示す。但し、基礎圧入、これを受ける小梁などは除く。

仕

棟

附

記

事

項

名称 共通事項 (その1)

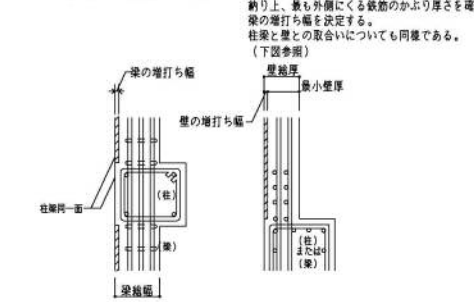
縮尺 R-1-1

1. 鉄筋のかぶりの厚さの最小値 (mm)

Table with 3 columns: 構造部分の種類 (Structural part type), 床版 (Slab), 仕上がりあり (Finish), 仕上がりなし (No finish), 全てのコンクリート (All concrete). Rows include 土に接しない部分 (Not in contact with soil) and 土に接する部分 (In contact with soil).

(注) 1. 目地がある場合のかぶり厚さは、目地底からとする。
2. 上表は、構造用軽量コンクリートの場合も含む。
3. 仕上げありとは、モルタル塗り・タイル張り等の仕上げのあるものとし、仕上げ塗材等などで鉄筋の耐久上有効でない仕上げのものを除く。(右図のかぶり厚さを参考)
4. 床版、梁、基礎および壁で流注土に接する部分のかぶり厚さには、接コンクリートの厚さを含まない。
5. 柱基礎の場合のかぶり厚さは、杭天端からとする。

2. 梁壁の増打ち幅



公共住宅標準詳細設計図集

仕

棟

附

記

事

項

名称 共通事項 (その3)

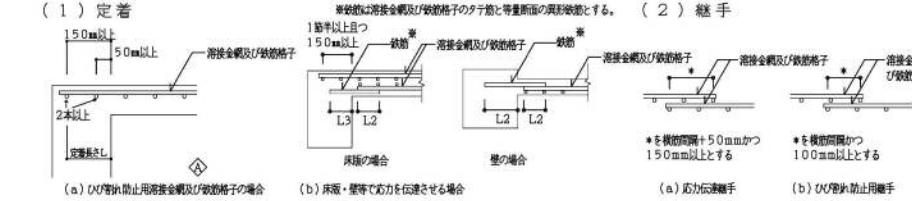
縮尺 R-1-3

1. 鉄筋の折曲げ規準

Table with 4 columns: 折曲げ角度 (Bending angle), 折曲げ図 (Bending diagram), 全てのコンクリート (All concrete), 使用箇所 (Usage). Rows show bending angles of 180°, 135°, 90°, and 90°/135° for various reinforcement types.

(注) Dは、曲げ内の寸法

2. 溶接金網及び鉄筋格子の定着と継手



公共住宅標準詳細設計図集

フックを必要とする末端部を次に示す。
1) 異形鉄筋では巻筋、あばら筋
2) 壁に用いる鉄筋 (壁の一部となる場合を含む)
3) 一般梁柱、梁 (基礎梁を除く) の出隅部分の重ね継手
◇ひび割れ防止に用いる溶接金網及び鉄筋格子の定着長さは、支持部材の内側表面から溶接金網及び鉄筋格子の表外端の敷筋までの距離とし、その値は敷筋間隔に50mmを加えた長さ以上、かつ150mm以上とする。

仕

棟

附

記

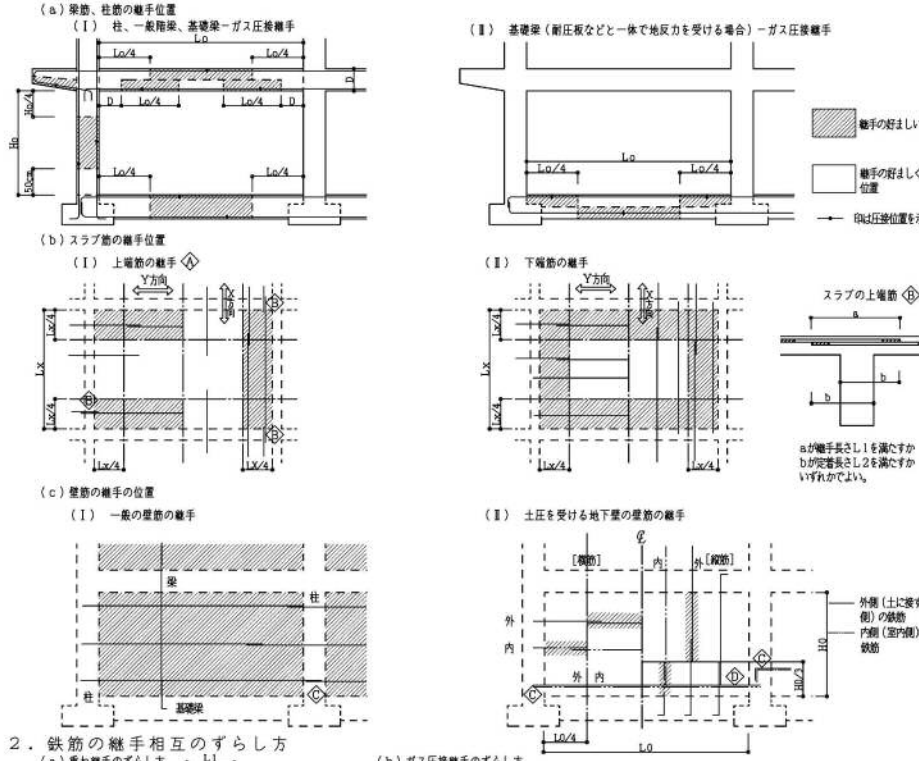
事

項

名称 共通事項 (その2)

縮尺 R-1-2

1. 鉄筋の継手位置 (ラーメン構造用)



2. 鉄筋の継手相互のずらし方



仕

棟

附

記

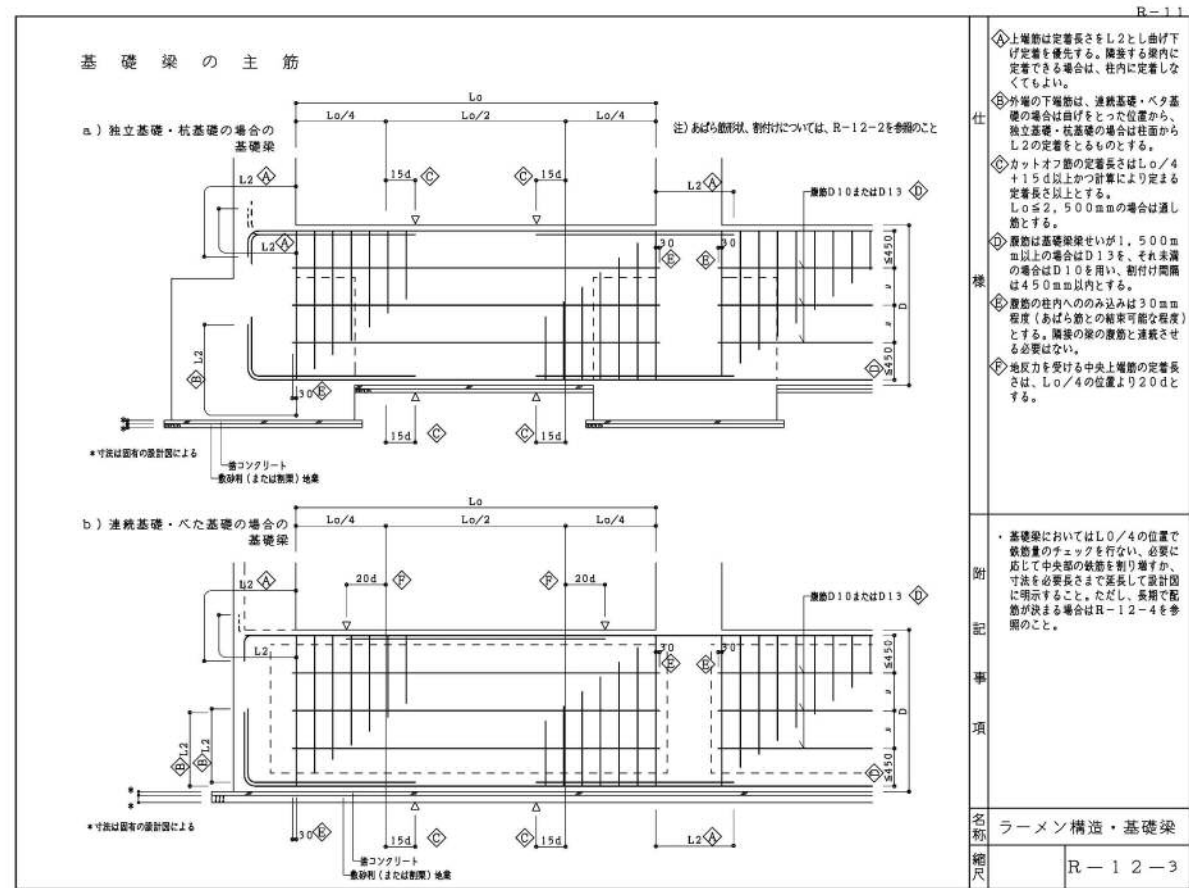
事

項

名称 共通事項 (その4)

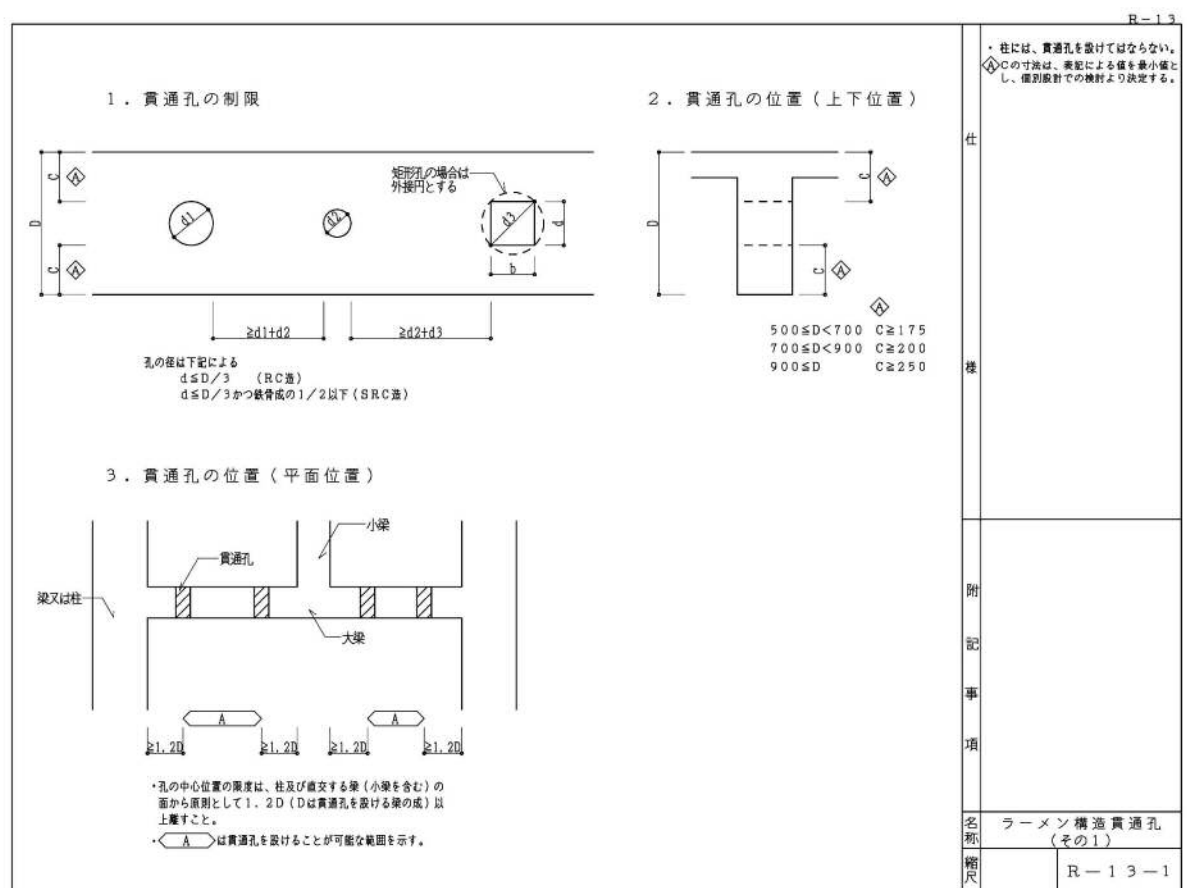
縮尺 R-1-4

Table with 2 columns: 住宅建築工事 (第 工区) (Residential construction work (1st section)), 図面番号 (Drawing number). Rows include 鉄筋コンクリート構造 配筋基準図 (1) (Reinforced concrete structure Reinforcement standard drawing (1)), 縮尺 A1: -, A3: -, No., and 愛知県建築局公共建築部公営住宅課 (Aichi Prefecture Building Agency Public Housing Office).



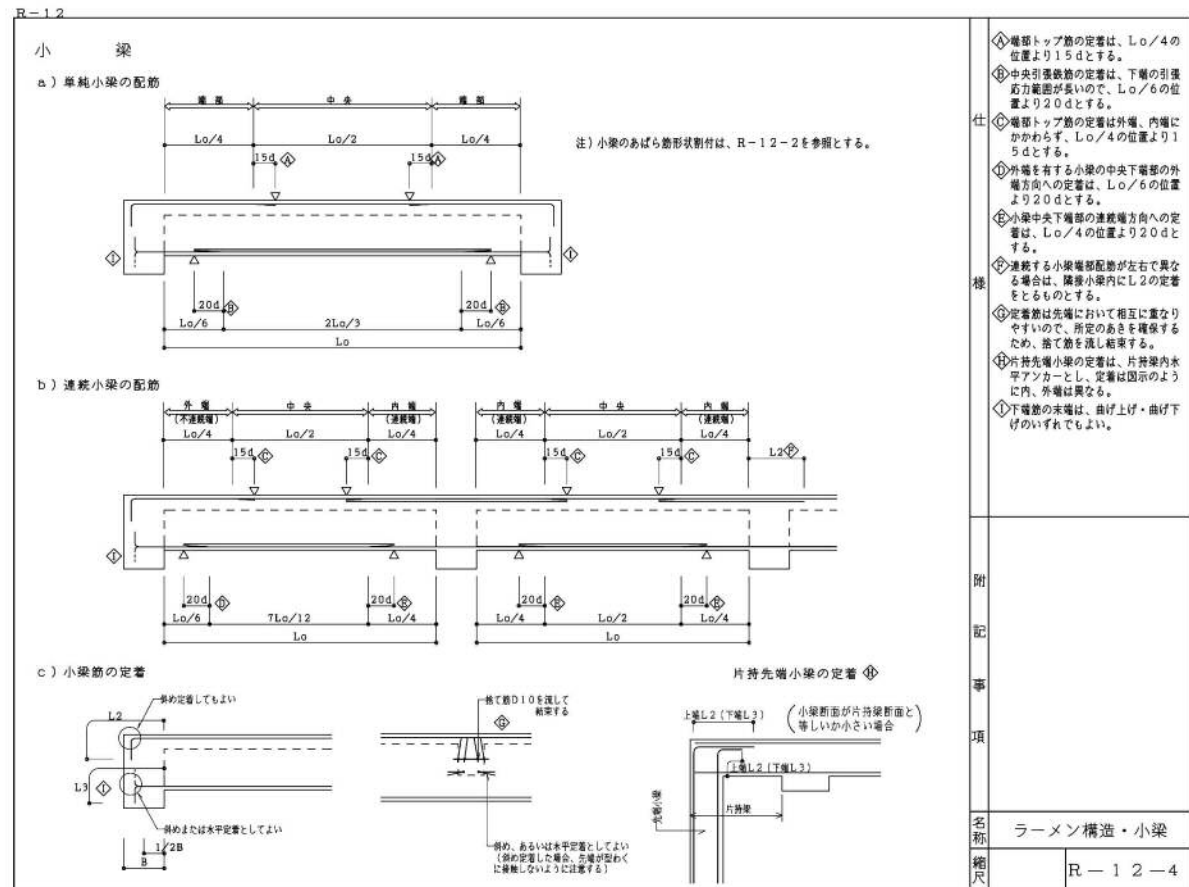
公共住宅標準詳細設計図集

仕	<ul style="list-style-type: none"> 上端筋は定着長さを$L/2$とし曲げ下げ定着を優先する。隣接する梁内に定着できる場合は、柱内に定着しなくてもよい。 外端の下端筋は、連続基礎・ベタ基礎の場合は曲げをとった位置から、独立基礎・杭基礎の場合は柱面から$L/2$の定着をとるものとする。 カットオフ筋の定着長さは$L/4 + 15d$以上かつ計算により定まる定着長さ以上とする。$L/4 \leq 2, 500\text{mm}$の場合は差し筋とする。 筋筋は基礎梁せいが$1,500\text{mm}$以上の場合は$D13$を、それ未満の場合は$D10$を用い、軒付け間隔は450mm以内とする。 筋筋の柱内へのみ込みは30mm程度（あばら筋との結束可能な程度）とする。隣接の梁の筋筋と連続させる必要はない。 地反力を受ける中央上端筋の定着長さは、$L/4$の位置より$20d$とする。
附	<ul style="list-style-type: none"> 基礎梁においては$L/4$の位置で鉄筋量のチェックを行い、必要に応じて中央部の鉄筋を削り増すか、寸法を必要長さまで延長して設計図に明示すること。ただし、長期設計図が決定する場合はR-1-2-4を参照のこと。
事項	
名称	ラーメン構造・基礎梁
縮尺	R-12-3



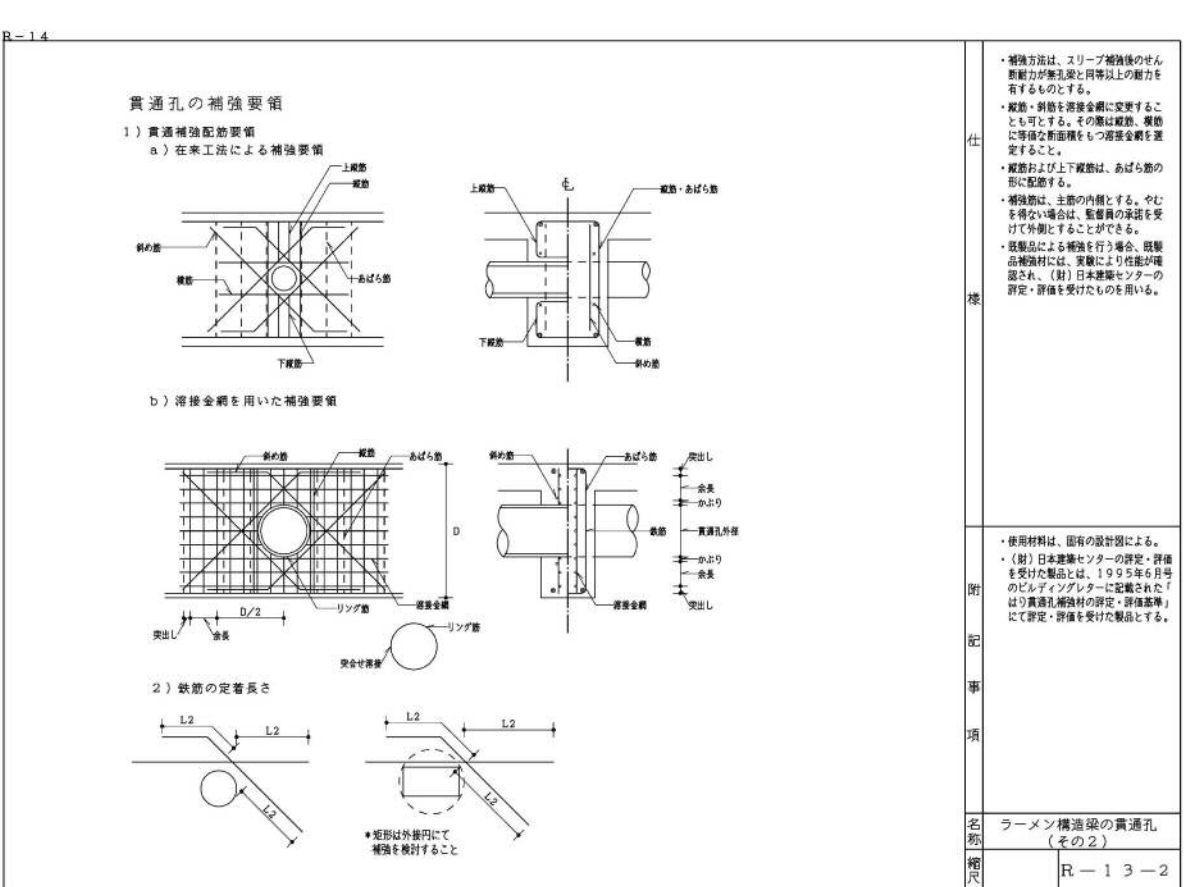
公共住宅標準詳細設計図集

仕	<ul style="list-style-type: none"> 柱には、貫通孔を設けてはならない。 ○の寸法は、表記による値を最小値とし、個別設計での検討より決定する。
附	
事項	
名称	ラーメン構造貫通孔 (その1)
縮尺	R-13-1



公共住宅標準詳細設計図集

仕	<ul style="list-style-type: none"> 端部トップ筋の定着は、$L/4$の位置より$15d$とする。 中央引張筋の定着は、下端の引張筋耐力範囲が長いので、$L/6$の位置より$20d$とする。 端部トップ筋の定着は外端、内端にかかわらず、$L/4$の位置より$15d$とする。 外端を有する小梁の中央下端筋の外端方向への定着は、$L/6$の位置より$20d$とする。 小梁中央下端筋の連続方向への定着は、$L/4$の位置より$20d$とする。 連続する小梁端部筋が左右異なる場合は、隣接小梁内に$L/2$の定着をとるものとする。 定着筋は先端において相互に重なりやすいので、所定のあきを確保するため、捨て筋を差し結する。 片持先端小梁の定着は、片持梁内水平アンカーとし、定着は図示のように、外端は異なる。 下端筋の末端は、曲げ上げ・曲げ下げのいずれでもよい。
附	
事項	
名称	ラーメン構造・小梁
縮尺	R-12-4



公共住宅標準詳細設計図集

仕	<ul style="list-style-type: none"> 補強方法は、スリブ補強後のせん断耐力が無孔梁と同等以上の耐力を有するものとする。 縦筋・斜筋を溶接金網に変更することも可とする。その際は縦筋、斜筋に等価な断面積をもつ溶接金網を選定すること。 縦筋および上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。 補強筋は、主筋の内側にし、やじを有しない場合は、金網の承認を受けて外周とすることができる。 既製品による補強を行う場合、既製品補強材には、実地により性能が確認され、(財)日本建築センターの認定・評価を受けたものを用いる。
附	<ul style="list-style-type: none"> 使用材料は、国産の設計図による。 (財)日本建築センターの認定・評価を受けた製品とは、1995年6月号のビルディングレターに記載された「はり貫通孔補強材の認定・評価基準」にて認定・評価を受けた製品とする。
事項	
名称	ラーメン構造梁の貫通孔 (その2)
縮尺	R-13-2

住宅建築工事(第 工区)			図面番号
鉄筋コンクリート 構造		縮尺	No.
配筋基準図(3)		A1: -	
		A3: -	
校	製	設計	愛知県建築局公共建築部公営住宅課

R-15

非耐力壁

1) 非耐力壁 配筋リスト

呼称	非耐力壁					備考
	W100	W120	W150	W180	W200	
断面図 (立断面)						極止め筋配置
縦筋	D10 @ 250	D10 @ 200	D10 @ 150	D10 @ 200	D10 @ 200	
横筋	D10 @ 250	D10 @ 200	D10 @ 150	D10 @ 200	D10 @ 200	
開口部曲げ補強筋	1 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	
開口部斜め補強筋	1 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	2 - D13	

2) コンクリートブロック壁 配筋リスト

呼称	コンクリート壁			備考
	CB100	CB150	CB200	
断面図 (立断面)				* 筋数は耐力壁を示す。
縦筋	D10 @ 400	D10 @ 400	D10 @ 400	
横筋	D10 @ 600	D10 @ 600	D10 @ 600	

3) 非耐力壁の割付け

仕 業
・壁のダブル配筋を行う場合、横筋は縦筋の外側に配す。
・壁の極止め筋の配置要領は、上記以外でのダブル配筋を行う場合にも適用とする。

附 記
事項
・スリット位置は設計図に明示すること。

名 称
縮 尺
ラーメン構造非耐力壁 (その1)
R-14-1

R-17

6) 完全スリット及び部分スリット要領

(a) スリット配筋例

(b) スリット部分の補強

① 部分スリット

- 梁-非耐力壁
- 柱-非耐力壁

② 完全スリット

- 梁-非耐力壁
- 柱-非耐力壁

※ a の寸法等は設計図による。

仕 業
・スリットの配置例を示して、実際のスリットの位置及び部分スリット、完全スリットの区分は設計図による。
・部分スリット部のアンカー筋は D10 @ 400 程度又はワイヤメッシュ 6φ150x150 のいずれでもよい。
・完全スリット部のアンカー筋は D13 @ 600 程度とし、柱への定着長さは 25d とする。
・スリット部分の鉄筋等のかぶり厚さは 30mm 以上とする。
・隣接スラブと連続する場合はスリットは、床面から 40mm の位置に設ける。

附 記
事項
・スリット位置は設計図に明示すること。
・スリット幅は、本体と同等の形状を考慮し、連続の場合、二次壁の高さ(梁の場合は二次壁の長さ)の 1/100 以上とする。

名 称
縮 尺
ラーメン構造非耐力壁 (その3)
R-14-3

R-16

4) 非耐力壁開口補強, スリット詳細

注) 開口部補強筋は全て D13 を示し、--- 表示の補強筋は W120 以上の場合に使用する。

(a) フレーム内の場合

(b) フレーム外の場合

5) ひび割れ防止用補強筋

溶接金網	壁厚	W100		W120, W150, W180, W200	
		a	b	a	b
6φ 100x100	200	400	200	-	-
8φ 100x100	200	200	200	400	200

格子鉄筋	壁厚	W100, W120		W150, W180, W200	
		a	b	a	b
D6 100x100	200	200	-	-	-
D10 100x100	-	-	200	200	-

仕 業
・スリットの要領は R-14-3 を参照する。
・開口部が柱に接する場合はそれぞれ縦筋、横筋の補強筋は不要とする。
・開口部補強筋はリストに表示したように W100 では 1-D13, W120 ~ W200 では 2-D13 とする。
・見付 200mm x 200mm 以下の開口部については補強は不要とし、縦・横筋は開口部を避けて割付け。
・斜め筋は縦筋、横筋の本数、サイズを増強して省略することができる。斜め筋のかわりに溶接金網、格子鉄筋を用いてもよい。
・開口部周囲に、斜め筋のかわりにひびわれ防止用の溶接金網、または格子鉄筋を用いる場合、サイズおよびピッチを表示する。
・開口部補強筋は縦・横・斜め筋を併用し、D10 @ 100 を最小とする。

附 記
事項
・スリット位置は設計図に明示すること。

名 称
縮 尺
ラーメン構造非耐力壁 (その2)
R-14-2

R-18

耐力壁・地下壁

1) 耐力壁の配筋, 定着

(a) 柱への定着

(b) 梁への定着

2) 地下壁の配筋, 定着

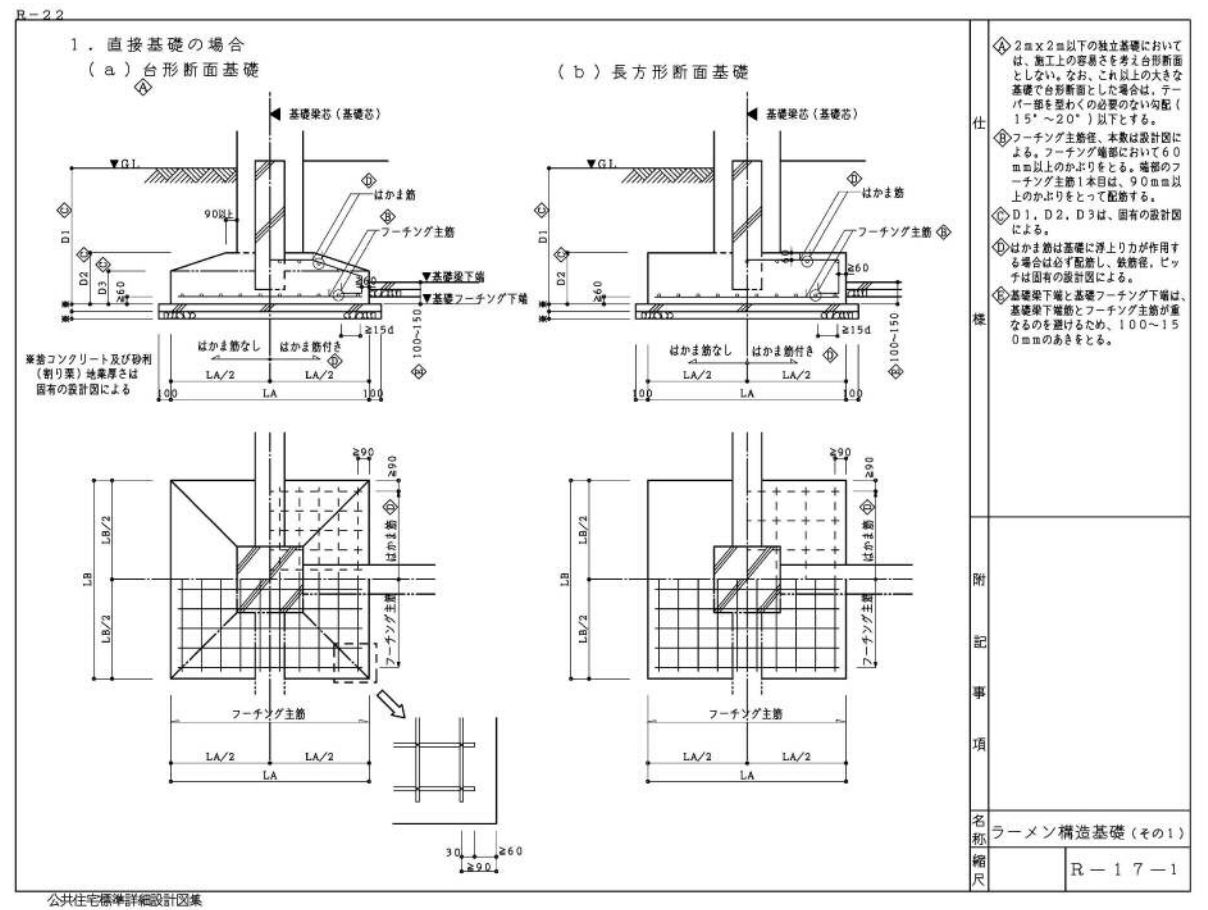
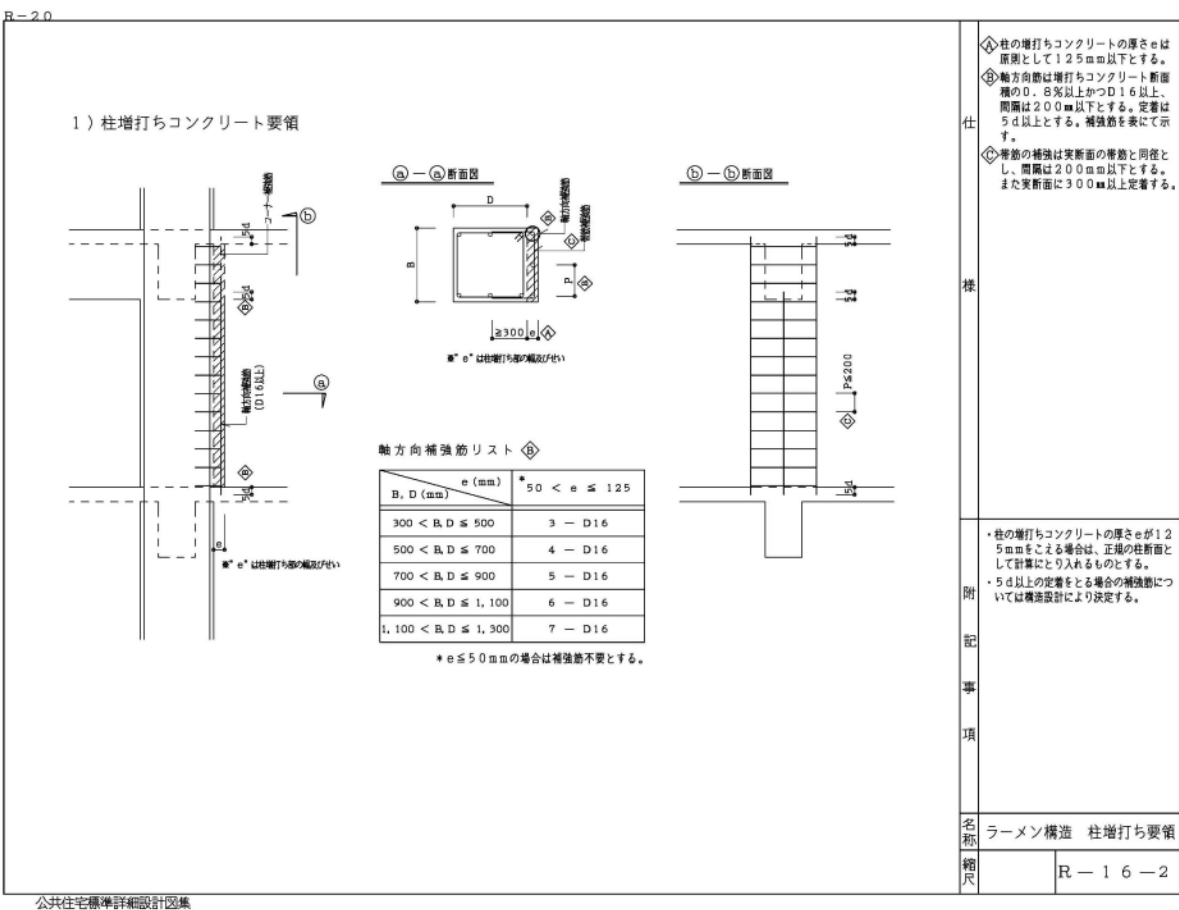
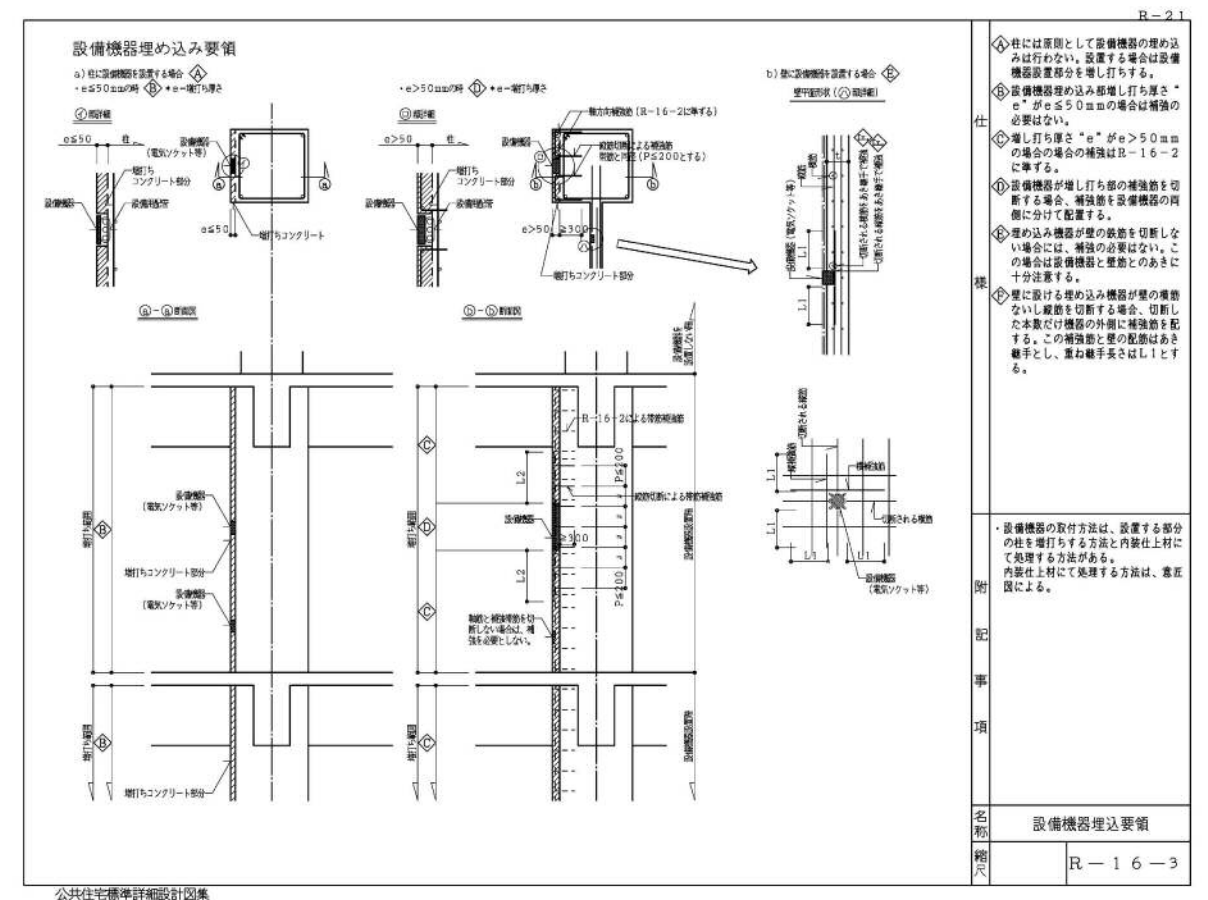
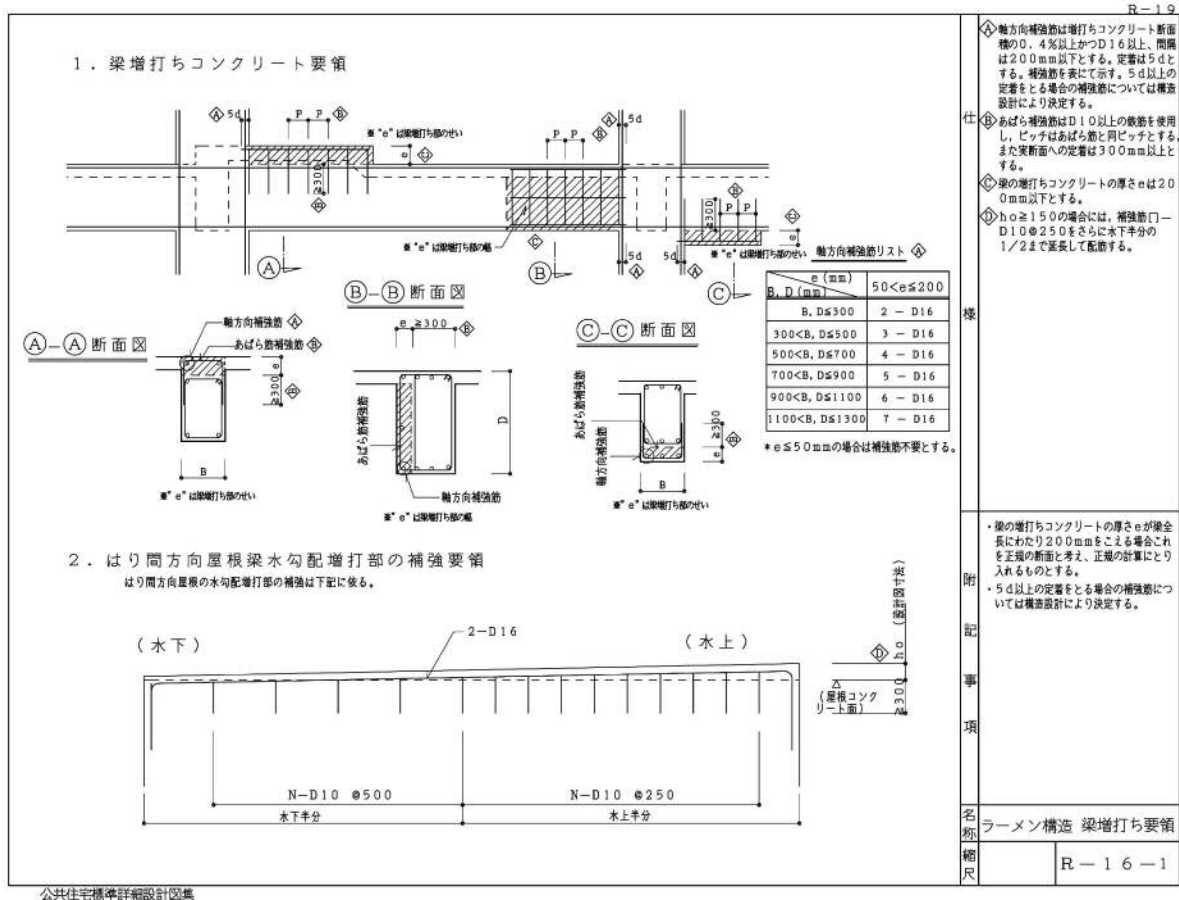
(a) 柱への定着

仕 業
・外側鉄筋は柱、梁断面内では定着せず、転手は壁厚外に設ける。
・内側鉄筋は柱、梁断面内に定着するか、または差込筋とする。
・鉄筋の第1鉄筋は柱、梁面より 50mm の位置に設け、壁筋はこれを基準として割付ける。
・外側鉄筋の本端は L2 かつ柱、梁断面内の中心線を超えて定着する。先端の折曲角は 90° 以上とし、余長は 150mm 以上を確保する。
・鉄筋は、梁をこえて転手長さの半分だけ立上げる。また上下の鉄筋ピッチが異なるときは転手としてよい。
・外側鉄筋は梁内に L2 かつ水平に 150mm の定着をとるものとする。
・基礎梁の定着は表示の補強筋より 1m ピッチ程度で転手の上端まで下げる。
・内側鉄筋は梁内に L2 の定着長をとるものとする。
・鉄筋の第1鉄筋は柱、梁面より 50mm の位置に設け、壁筋はこれを基準として割付ける。
・外側鉄筋は原則として柱内定着せず、壁厚外で転手を設けるものとする。
・内側鉄筋は柱内に定着し、定着長は L2 とする。
・鉄筋の配置により、e の値が変化するので設計上の "te" の値は鉄筋を考慮の上決定すること。
・柱主筋 D25, 壁筋 D16 のときは、e = 4mm とする。
・極止め筋は D10 @ 1,000mm 以内とする。

附 記
事項
・壁のダブル配筋を行う場合、横筋は縦筋の外側に配す。ただし地下壁については、縦筋は横筋の外側に配す。

名 称
縮 尺
ラーメン構造耐力壁・地下壁
R-15-1

住宅建築工事(第 Ⅱ 区)		図面番号
鉄筋コンクリート構造	縮尺 A1: - A3: -	No.
配筋基準図(4)		
検 査	製 図	設 計
愛知県建築局公共建築部公営住宅課		



住宅建築工事(第 工区)		図面番号
鉄筋コンクリート 構造	縮尺	No.
配筋基準図(5)	A1: - A3: -	
校 図	製 図	設 計
愛知県建築局公共建築部公営住宅課		

R-3-9

床スラブ配筋基準

4 辺固定スラブ

3 辺固定 1 辺自由スラブ

[1] 上端筋 下端筋

[2] 上端筋 下端筋

No	版厚	位置	短辺方向		長辺方向		備考
			柱間部	柱間部	柱間部	柱間部	
		上端筋	(A)	(B)	(C)	(D)	
		下端筋	(E)	(F)	(G)	(H)	

a. 継手長さ……L1 (引張り応力を受ける箇所) L2 (圧縮応力を受ける箇所)
b. 定着長さ……(上端筋……L2) (下端筋……L3) 要項は*図1による。

*図1 (耐圧種)

床板 (その1)

R-51-1

公共住宅標準詳細設計図集

R-4-1

1. 壁受部分のスラブ補強

スラブに壁に取り付けるときは、壁筋を階間へ交互にアンカーする。(定着長25d)

2. スラブ受け筋

梁中間にスラブが取り付くときはスラブ上端筋の発付筋を入れる。

3. スラブ段差部配筋要領

h ≤ 150mmの場合-1

h ≤ 150mmの場合-2

h > 150mmの場合

4. スラブ開口部補強

※ 斜筋は、スラブ上端筋・下端筋の内側に配置する。
a. 200 ≤ a ≤ 600 の場合

b. a < 200 の場合……補強筋は環状
a > 600 の場合……補強筋は斜筋により決定する

※ メッシュによるスラブ開口部補強

床板 (その3)

R-51-3

公共住宅標準詳細設計図集

R-4-0

床板配筋要領

SRC部分下端筋の納まり

床板スプーラー配置要領

[1] 住戸部分床板の上層スプーラー

住戸部分床板の上層には、プラスチックスプーラーまたは鋼製スプーラー（いずれも鉄筋すれ止め工夫のあるもの）を貫筋の位置（O印にて示す）に750mm以下の間隔で設置し、床端部配筋の位置（・印にて示す）に600mm以下の間隔で設置する。ただし、短辺方向の長さが300mm以下の場合は、床端部配筋の位置のスプーラーの間隔を750mm以下とすることができる。

[2] 住戸部分床板の下層スプーラー

住戸部分床板の下層には、プラスチックスプーラー（下部直付き）または鋼製スプーラー（鉄筋すれ止め工夫のあるもの）を床板1階当たり2層程度の割合で有効に設置する。

床板 (その2)

R-51-2

公共住宅標準詳細設計図集

R-4-2

◎1階スラブ（土間コンクリートスラブ、後打ちスラブ）差し筋要領

1. 土間コンクリート配筋、差し筋

・差し筋の折曲げ起点は基礎梁中心をこえる位置に設ける。

・基礎梁天端と土間コンクリート天端、同レベルのとき

・土間コンクリートを基礎梁から切り離す場合

2. 1階後打ちスラブ差し筋要領

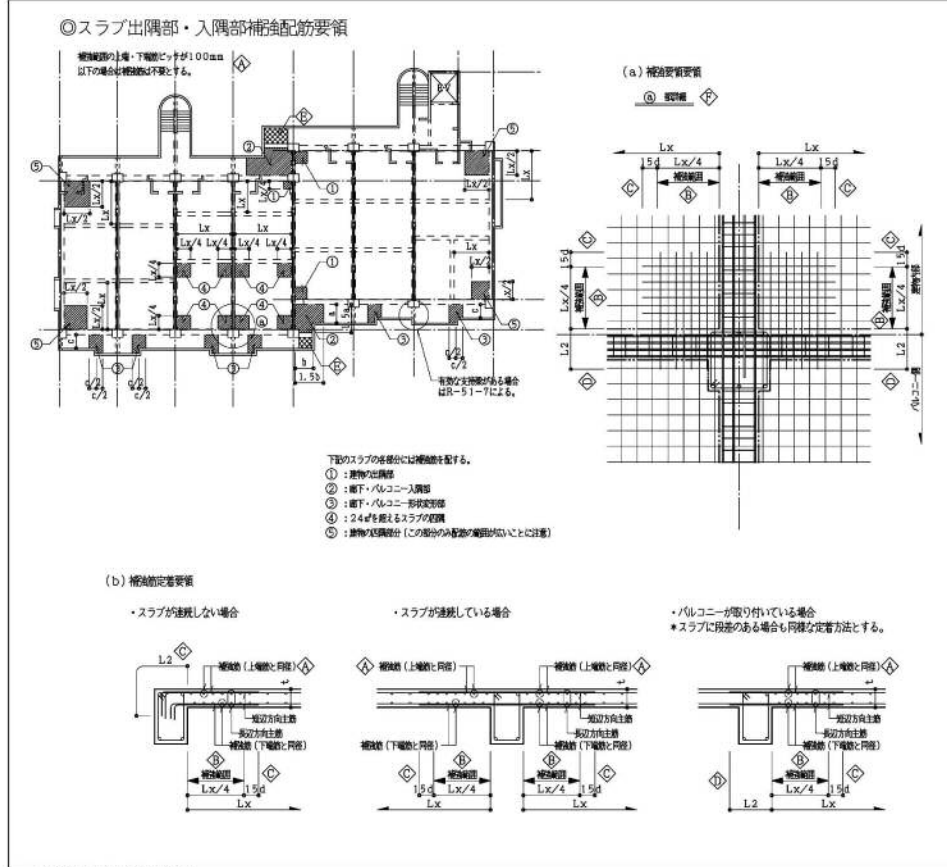
(スラブ厚み及び発着量は各工務団体の打ちスラブ配筋リストに依る)

床板 (その4)

R-51-4

公共住宅標準詳細設計図集

住宅建築工事(第 工区)		図面番号
鈴木 浩	鉄筋コンクリート 構造 配筋基準図(7)	
校 図	製 図	設 計
愛知県建築局公共建築部公営住宅課		



仕
様
事
項

◆建築物の四隅・スラブの出隅・入隅部・形状変更部は、長辺方向・短辺方向共に、スラブの上・下層筋と同径の補強筋を各配筋と同レベルで追加する。ただし、設計時における配筋ピッチが100mm以下の場合は、補強筋は不要とする。

◆建築物の四隅・スラブの出隅・入隅部・形状変更部の補強範囲内の補強筋は、上層筋・下層筋ともピッチが100mm以下となるように配筋する。

◆補強筋の末端部はスラブ上層筋と同径の定着・余長とする。

◆バルコニーに取渡がなく、隣接スラブ内に定着できる場合は、取渡を差支えてもよい。

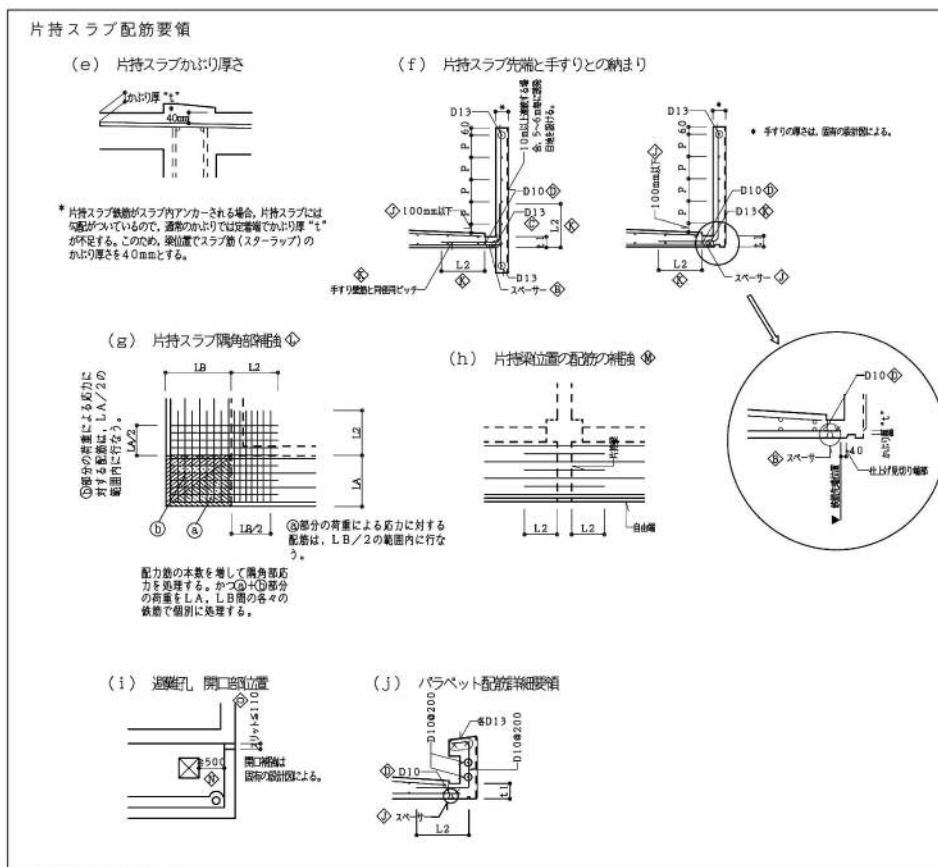
◆バルコニー出隅部についてはR-51-7を参照のこと。

◆R-51-3に示す開口補強筋と出隅部・形状変更部の補強筋が同一位置となる場合は、R-51-3の補強筋を優先して配筋を行う。

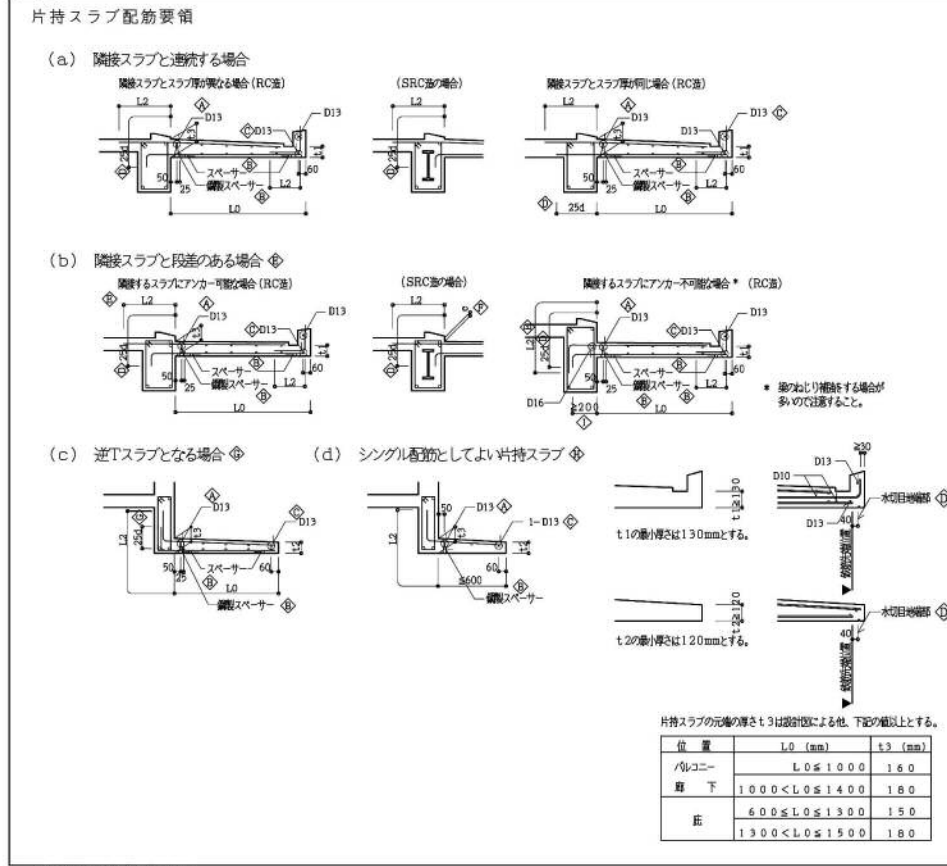
名称
床板(その5)

縮尺
R-51-5

公共住宅標準詳細設計図集



公共住宅標準詳細設計図集



仕
様
事
項

◆R-51-6による。

◆先端手すり壁の配筋はスラブの上・下100mm以内に第1層筋を配し、取付を行う。

◆手すり壁がスラブの上層筋の場合、手すり壁筋をスラブ内に2層アンカーする。垂れ壁がある場合は手すり壁の配筋を垂れ壁まで延長し、型補強筋を配する。

◆片持スラブ隅部は、斜め筋による補強は行わない。(補強筋を配すと6層配筋となるため)

◆片持梁位置には片持スラブ上層筋による補強を行う。補強筋は片持スラブ内に2層定着すること。

◆遊樂具の開口は、手すり端部より500mm以上離して設ける。

◆手すり壁が、柱及び壁に取り付く場合は手すり壁と柱及び壁の間にスリットを設ける。ただし、スリットを設けず手すり壁の柱及び壁に対する影響を考慮した設計を行う場合は、スリットを設けなくてもよい。

・片持スラブの出寸法(L₀)は、梁面からとする。また、L₀が大きい場合、片持スラブの先端に集中荷重が作用する場合は、片持梁にて補強を行う。

・片持スラブ厚さ、寸法、配筋は固有の設計図による。

・本配筋設計図は、“ラーメン構造”及び“壁式構造”で共通に使用するものとする。

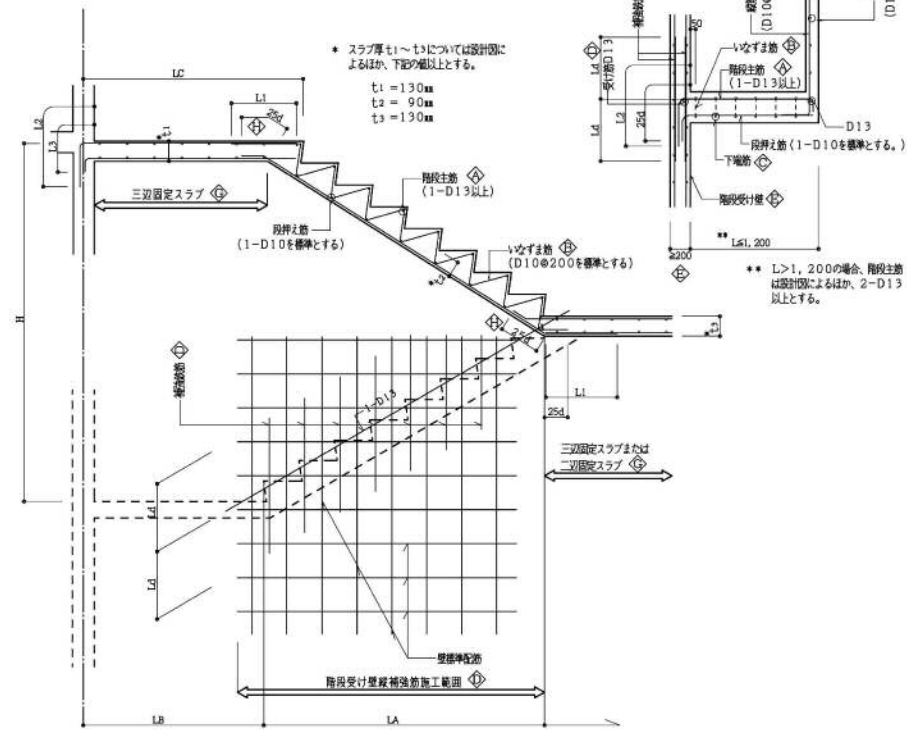
名称
片持スラブ配筋要領(その1)

縮尺
R-51-6

公共住宅標準詳細設計図集

住宅建築工事(第 工区)		図面番号
鉄筋コンクリート構造	縮尺 A1: - A3: -	No.
配筋基準図(8)		
校 図	製 図	設 計
愛知県建築局公共建築部公営住宅課		

階段配筋詳細図
1) 片持階段の配筋 [住棟内]

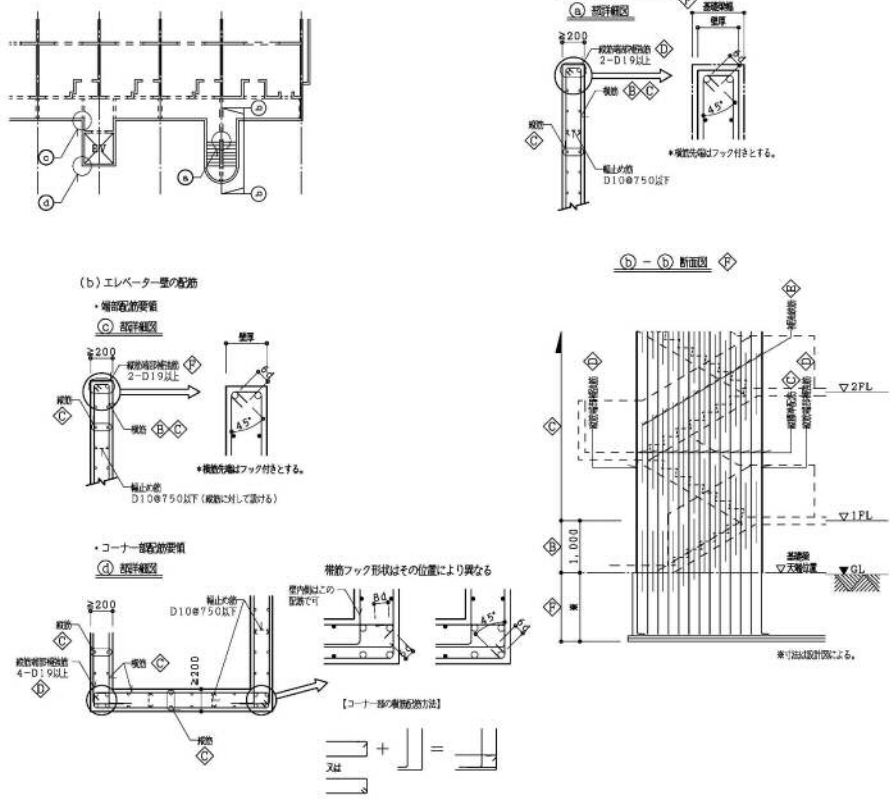


- 階段主筋は設計図によるほか、1-D13以上とする。
- いかなる主筋はD10@200を標準とし、階段受け壁より50mmの位置に等しいいかなる主筋を配筋する。
- 下階筋はD10@200を標準とする。(ビッチはいかなる主筋と同じとし、いかなる主筋の間に配筋する。)
- 片持階段受け壁に設ける段床の曲げ補強筋の有無、及びその定着長さsは設計図による。
- 階段受け壁の厚さは200mm以上とする。
- 屋外階段受け壁の配筋については、R-55-3を参照する。
- 階段手すりの配筋要領は片持スラブ先端の手すりの配筋要領(R-51-7)に準ずる。
- 覆り端のスラブは三辺固定スラブ、または二辺固定スラブとして計算した上でモザイク配筋を行うものとする。

・L.A, L.B, L.C, Hは固有の設計図による。

名称 階段廻り(その1)
縮尺 R-55-1

3) 屋外階段及びエレベーター壁配筋要領

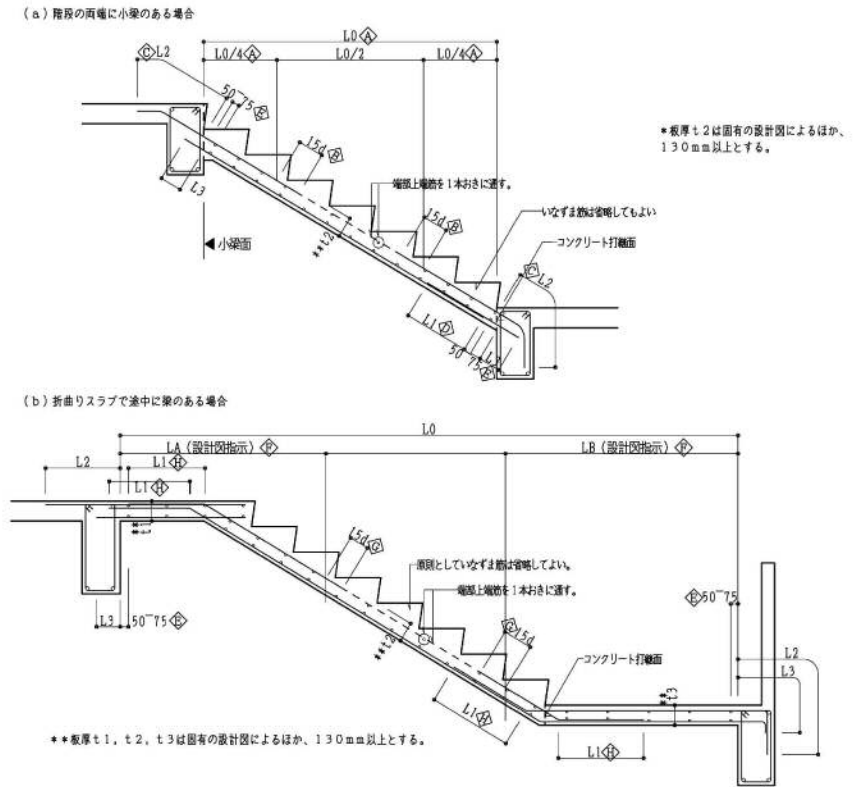


- 建物本体から突出する屋外階段の受壁及びエレベーター壁の構造は配筋の外観に等価形式で配筋する。
- 壁構造は、基礎梁天端から1m以内は、ビッチ計算による他、D10@100以下となるように配筋する。
- 壁筋・構造は、ビッチ計算による他、D10以上の筋を@250以下となるように配筋する。
- 配筋端部補強筋は計算による他、壁端部は2-D19以上、コーナー部は4-D19以上の筋を配筋する。
- 壁筋の配筋詳細については、R-55-1を参照する。
- 配筋は基礎梁内で十分な拘束を行う。この時、基礎梁筋は壁厚以上とする。

・段部の配筋(いかなる筋等)はR-35, R-55-1による。
・本図は、「ラーメン構造」「壁式構造」にて共通とする。

名称 階段廻り(その3)
縮尺 R-55-3

2) スラブ階段の配筋



- 主筋の端部中央の区分は、階段内のリズL0の1/4の点とする。(通常のスラブと同様である。)
- 端部トップ筋の余長は、L0/4の点より15dとする。
- 端部上層主筋は隣接するスラブ内、または壁に十分定着させること。定着長は2tとする。
- 端部区分はL0/4の区間内とする。コンクリート打継面があるので注意すること。
- 配筋端部位置を示す。配筋筋はこの位置から計れる。
- 主筋の端部中央の区分は設計図によるものとする。
- 端部の上層筋の余長は区分より15dとする。
- 折曲り点において上層筋、下層筋とも継手長さL1をとって、各スラブ筋と連続させる。

・段部の配筋(いかなる筋等)はR-35, R-55-1による。

名称 階段廻り(その2)
縮尺 R-55-2

住宅建築工事(第 工区)		図面番号
鉄筋コンクリート構造	縮尺 A1: - A3: -	No.
配筋基準図(θ)		
校 図	製 図	設 計
愛知県建築局公共建築部公営住宅課		